

オランダのスミスとヘルウイス

— 17世紀アムステルダムにおける

ピューリタン分離派との関係を手がかりに —

金丸英子

はじめに

ジョン・スミス (John Smyth, c.1570-1612), トマス・ヘルウイス (Thomas Helwys, c.1575-1614) の二人を「バプテストの父祖」とみなすことについては、今日の研究者の間では異論はないであろう。後年のスミスは自らの手による自己バプテスマを悔い、アムステルダム・ウォーターランドのメノナイト教会への転入会を申し出た。ヘルウイスはこれを巡ってスミスと衝突・決裂し、10名にも満たない少数の同心の仲間と共に殉教覚悟でロンドンに戻り、英語圏初のバプテスト教会を始めることになった。しかし、教会理解の点では両者は最後まで同じであった。すなわち、教会員資格としての信仰者のバプテスマと、その者たちによる教会形成がそれである。

スマイスのメノナイト教会転入の表明までの期間、スマイスとヘルウイスは常に共に行動してきた。16世紀後半から17世紀前半のイングランド非国教派らは、まず国民教会であるイングランド国教会を批判し、そこから分離した後、最終的には自らの信仰的確信に基づく教会を創設するに至った。スマイス、ヘルウイスの場合も同様に、イングランド国教会、ピューリタン、ピューリタン分離派、バプテストという変遷を辿っている。スマイスが自ら牧す教会の教会員を引き連れてオランダへ亡命したのは1607年ごろのことであるが、その時点では当然バプテストではなく、ピューリタン分離派牧師としての亡命

であった。ヘルウィスはスマイスの教会の中心的な信徒として、牧師スマイスと共にオランダへ亡命したが、実質的な援助を以ってスマイスを助けているので、ヘスウィスの存在抜きにはこの亡命の実現はなかったと言っても過言ではない¹。

亡命先としてオランダを選んだ理由は、次の要因が考えられる。まず、オランダにおける社会的な受け皿の存在である。当時すでに多くのイングランド人がオランダへ移住し、市民生活を営んでいた。オランダでは、好調な経済発展のために外国人の職業選択が比較的容易であったが、それに加えて、オランダとイングランドの間には、古くから友好関係が築かれていたため、多くのイングランド人がオランダへ移り、そこで居住する環境は整っていたと言ってよい。従って、スマイスらの亡命が他のイングランド人のそれと比べて取り立てて特異であったわけではない。

強いて特徴的なことと言えば、スマイスたちにとって、信仰的立場を同じくするイングランド人のピューリタン分離派がすでにそこで活動しており、教会も設立されていたという事実である。イングランドとオランダの間の友好関係という社会的な条件に加えて、このことはオランダ亡命を更に勇気づける魅力的な要因であったことが推測される。中でも、スマイスのケンブリッジ大学在学中の恩師フランシス・ジョンソン (Francis Johnson, 1562-1618)

1 イングランドでスマイスが牧していた教会は、ロンドン郊外のゲーンスポロ (Gainsborough) にあった。教会員には複数の元国教会牧師、聖職者ではなかったがケンブリッジで教育を受けた高学歴者等が含まれていた。その教会の詳細は複数の文献で確認できるが、情報量、分析の面で信頼できると思われるのは次の文献である。古典的なものでは、W. T. Whitley, ed., *The Works of John Smyth*, Vol.1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1915), 比較的新しいものでは、James R. Coggins, *John Smyth's Congregation: English Separatism, Mennonite Influence, and the Elect Nation* (Waterloo, Ontario: Herald Press, 1991), Jason K. Lee, *The Theology of John Smyth* (Macon, GA: Mercer University Press, 2003), Stephen Wright, *The Early English Baptists: 1603-49* (Rochester, NY: Boydell Press, 2006) 他がある。ヘルウィスは地方貴族の家系であり、自身はノッティンガムシャー (Nottinghamshire) の裕福な弁護士であった。ヘルウィスは自宅を分離派指導者の会議場として解放するなどして、分離派の活動を支援していた。ヘルウィスの財力はスマイスとその教会のオランダ亡命をも可能にした。イングランド、オランダにおける関連の地理は、巻末の地図1, 2を参照。

が牧師をしていたアムステルダムで最初の分離派教会であった古代教会 (Ancient Church) の存在は、特別であったと思われる。研究者の中には、スミスたちはジョンソンの教会に合流することをすでに決めてから、イングランドを後にしたと言う者もある²。

スマイスの一行は1607年から08年にかけてアムステルダムに到着し、その後、姉妹教会とも言うべき古代教会との接触が始まった。その頃の古代教会は、少なくとも300人の陪餐会員を擁し、牧師、教師、長老4名、執事3名という典型的な改革派教会の伝統の影を濃く落とす、いわゆる「教職者集団」が存在していた。しばらくの間、スマイスたちはそこで共に礼拝をし、信仰の交わりを享受するも、最終的にはそこを出ることになる³。その後、前述の信仰者による新しい教会の設立へとつながってゆく。スマイスとヘルウィスというバプテスタの父祖たちにとってのオランダにおける経験は、その期間こそ短かったものの、古代教会との不協和音に始まり、古代教会との離別、新しい教会創設への模索、その結果、両者のその後の方向を決定づける様々な事件への遭遇というように、「restless (落ち着かない、休む間もない)」という表現があてはまる怒涛の日々であった。本小論では、バプテスタとなる前の両者の足取りの一端を17世紀アムステルダムにおけるイングランド・ピューリタン分離派との関係から辿り、後年のバプテスタ派の起こりと、両者をそれへと押し出した神学的主張を探る一助としたい。

1 イングランドとオランダ：「古きよき盟友」

一般に、イングランド人の国外亡命と言えば、1620年のピルグリムズ (the Pilgrims) と呼ばれるイングランド・ピューリタンの一団がアメリカ・ニューイングランド地方へ渡ったことがまず念頭に浮かぶ。そのため、イングランドの国外移住に関しては、アメリカに光が当てられていることが多い。しか

2 Scott Culpepper, *Francis Jonson and the English Separatist Influence* (Macon, GA: Mercer University Press, 2011), 185.

3 この顛末については、拙著「ジョン・スマイスの『信仰者のバプテスマ』理解—「Actual」の概念から— (『西南学院大学神学論集第69巻, 2012年) を参照。

し、イギリス史においては、これに関してはオランダもアメリカと同等の地位を占めている。すでに述べたようにオランダとイングランド両国の間には友好関係が存在していたが、それは、エリザベス1世 (Elizabeth I, 1553-1603 [在位1588-1603]) の治世にまで遡る。当時のカトリック2大強国フランスとスペインに自国の運命を左右されてきたという歴史的に共通な経験もあり、エリザベスは王位に就く前から、オランダを「古きよき盟友」と呼ぶほどにオランダに親近感を抱いていたと言われている⁴。王位就任後は、経済的には近い交易国として、宗教的にはフランス、スペインと対峙するプロテスタント国家同士として、人と物の交流が頻繁に行われるようになった。

この関係は、両国の対スペイン政策の面では見逃すことができない。例えば、17世紀前半のオランダにおけるイングランド人移民の内訳は、スペインの勢力を牽制するオランダ駐留の兵士が最大の社会層となっていた。この兵士たちは「遠征軍」とよばれており、その歴史はイングランドがスペインと開戦し、オランダの独立を支援し始めた1585年に遡る。爾来、5,000人から6,000人の兵士がイングランドから送り出されたが、この数は1600年代に入っても変わることなく維持されたと言われる⁵。このことは、覇権とまでは呼べないにしろ、当時のオランダにおいてイングランドの存在は軽視できるほどの小さなものではなかったことを窺わせる。このような両国の関係はまた、1588年、イングランド制圧に来襲したスペイン無敵艦隊をイングランドが撃沈したことにも象徴されている。この大艦隊は、時のスペイン王フィリペ2世が周辺諸国における覇権を狙ったことによるもので、総勢約130隻からなる艦隊であった。その標的はエリザベス1世治世下のイングランドであり、目的はイングランド国内におけるカトリック復活と、イングランドのオランダ独立支援を妨害であった。無敵艦隊は敗北し、以後スペインの海上権は衰退に向かったが、それによってオランダはスペインからの完全な独立

4 Keith L. Sprunger, *Dutch Puritanism: a history of English and Scottish Churches of the Netherlands in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (New York: E. J. Brill, 1982), 3.

5 前掲書, 5頁。他の資料では、6,350人の兵士と1,000頭の軍馬を調達したとあり、これら軍費は折半されたとある (Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall, 1477-1806* [Oxford: Clarendon Press, 1998], 219-220)。

を果たすようになる。

オランダ国内ではそれより少し前の1579年、反スペインを標榜する反乱軍側に7つの州（Provinces）が共闘してスペイン軍と戦うことをユトレヒト同盟の締結を以て約束したが、この7州（ホラント、ゼーラント、ユトレヒト、ヘルデルランド、オーフェルエイセル、フリースランド、フローニンゲン）が、オランダ連邦共和国となっていった⁶。1600年頃までには、かつてスペイン軍によって取奪されていた全州のほとんどは軍事的に解放され、オランダ連邦共和国の国家体制の基礎が作り上げられた。オランダの活発な経済活動はこの独立と大いに関係しており、従来から活発であったバルト海からの穀物、木材などの輸入や海運業による活発な貿易は更に盛んになった。これに比例して労働者の需要も大きくなり、とりわけ南部の都市には、ヨーロッパ各国から商人、水夫、職工が職を求めて移民となって流れ込んだ。特にアムステルダムでは、毎年1,700人にのぼる新たな外国人労働者が必要とされたため、17世紀末には人口が20万人にまで膨れ上がったといわれている⁷。

このことは、国際的に活躍する外国人商人のオランダ流入を可能にした。外国人商人らは、地元の商人を遥かに超える巨額の資本とそれと並行して発達した商業組織を備えており、そこから、フランス、スペイン、ポルトガル、地中海を中心とする南欧との商取引関係をオランダ国内、特にアムステルダムにもたらしめた。これはオランダのヨーロッパ各地との経済連携を可能にしたが、その範囲は拡大の一途を辿り、1600年以降は南洋の胡椒貿易にまで手を広げることとなった。加えて、ライデンを中心に発達した毛織物産業によって市場は更に拡張し、1602年の東インド会社設立の基礎を据える主要な要因となった。このような中、アムステルダムはオランダ経済の中心となる。1608年のアムステルダムには豪華な商品取引所が建設され、市は段階的に拡

6 オランダを含む当時のベネルクス三国（ベルギー、オランダ [ネーデルラント]、ルクセンブルク）の政治状況は中世中期の神聖ローマ帝国時代にまで遡り、加えて、フランス、ドイツの国家状況も絡んで把握が複雑である。相応しい邦語文献も限られている。その分野の初心者には、栗原福也著『ベネルクス現代史』（山川出版社、1982年）を勧めたい。

7 James R. Coggins, *John Smyth's Congregation: English Separatism, Mennonite Influence, and the Elect Nation* (Waterloo, Ontario: Herald Press, 1991), 45.

張し、ヨーロッパ初の公立の振替銀行も設立された⁸。

多くの移民をひきつけたのは、このような経済成長ばかりではない。活発な経済活動に伴ってもたらされた思想・宗教の分野における自由もその大きな牽引力となった。オランダ国内には異なる思想や宗教に対する寛容な雰囲気満ち、その活動の自由も保障されていた。自国で禁書扱いされて発禁処分となった書籍はオランダ国内で印刷され、自由に流通し、広く読者を獲得したため、国内の主要都市は、哲学者を含むそれら「禁書」の著者、知識階級はもとより、イングランドのピューリタン分離派指導者ロバート・ブラウン (Robert Brown, 1773-1858) の流れを汲むブラウン派、ユダヤ教徒などの宗教的少数者にとって、格好の環境を提供したことが推測される。

しかしながら、そのように宗教的少数者の理想郷の観を呈していたオランダではあったが、すべての宗教的少数者にその恩恵を平等に享受させていた訳ではない。特定のイングランド人キリスト者に関しては、必ずしもあたたかい歓迎を与えなかった。ブラウン派と目された者たちやピューリタン分離派がそれである。先に触れたように、当時のオランダにおけるイングランド人移民の社会構成の最多数は、駐留兵士であったが、それに次いで多数を占めたのは宗教的な理由で海を渡ったキリスト者たちであった。そのほとんどは改革派のキリスト者で、17世紀初頭、ライデン、ユトレヒト、デルフトなどの都市にはそれぞれ100人単位で存在していた。アムステルダムも同様で、1607年のある教会記録では、68名の教会員が確認され、それが1623年には450名にまで増加したとある⁹。当時のイングランド側の政治的パートナーは国王ジェームズ1世 (James I [スコットランド王ジェームズ6世], 1566-1625, 在位は1567-1625) で、宗教政策では強固な保守主義の立場を堅持し、それによって国教会体制を維持していたため、ピューリタンやピューリタン分離派の国外亡命を余儀なくさせた。オランダ側としては、国益のためにイングランドとの友好関係を保持しようとするれば、オランダ国内のイングランド人キリスト者の取り扱いについては極めて慎重で、基本的にはジェームズ1世

8 栗原福也著『ベネルクス現代史』(山川出版社, 1982年), 46-7頁。

9 Sprunger, 7

に添う形で対応をしたものと思われる。そうであったにもかかわらず、スマイスらピューリタン分離派を国内に受け入れたのは、「良好な経済発展に裏打ちされて、思想的寛容の空気に満ち、多くの外国人居留者を要した活気あふれる国際文化都市オランダ」として、より多くの労働者の獲得とそこから生み出される経済効果を優先する意図が働いたことは否定できないであろう¹⁰。

2 アムステルダムのピューリタン分離派

「低地地方」を意味するネーデルランド（Netherlands、日本語表記ではオランダ）にあって、アムステルダムは国内最大の都市、世界有数の国際貿易都市としての地位を築いており、17世紀には国内で他の追従を許さない程の主要都市となっていた。人口の増加も目覚ましく、15世紀初頭には14,000人足らずであったが、17世紀には50,000人を越え、18世紀には20万人を数えたと言われている¹¹。既に述べたように、このようなアムステルダムの人口増加は、ヨーロッパ各地から流れ込んだ移民がもたらしたものであった。オランダ国内の他の都市の場合と同様、強い軍事力、個人の生活と財産を保護する目的で整備された行政と法、アムステルダムの金融機関などの社会的環境は当然ながら移民たちにとっては魅力的であったが、思想と宗教に対する自由と寛容も決して小さくなかったと思われる。

アムステルダムにおけるイングランド人の宗教事情に関しては、最初にできたイングランド人教会は分離派の教会であったので、アムステルダムとピューリタン分離派の関係は深いと言わざるを得ない。1590年代にロンドンか

10 Coggins, 46. たとえば、現存の結婚証明書によれば、スマイスの教会の男性教会員4人のうち3人は織物工場の職工として記録されている。ライデンは、農村における毛織物産業の繁栄を担っていたプロテスタントの織元や織布工の移住者を積極的に受け入れたため、急速にヨーロッパ有数の大毛織物都市と化したが、それはアムステルダムの羊毛輸入と毛織物製品の輸出によるところが大である。これら商工業の繁栄で蓄積された巨額な富は資本となり、17世紀以後、アムステルダムをヨーロッパ最大の金融市場に押し上げた（福田、47頁）。このことから、国内における労働力獲得とその優先順位は極めて高かったものと思われる。

11 Sprunger, 43

らやって来たピューリタン分離派によって始められ、1593年には市内でその存在が認められている。当時、アムステルダムにける最大のプロテスタント教派はオランダ改革派であったが、そのオランダ改革派の牧師が市内で英語による説教に遭遇したとの報告がアムステルダムにおける分離派教会の存在を物語る根拠とされている。アムステルダムのオランダ改革派たちは、その報告に看過できない「重要な事柄 (a matter of importance)」が含まれており、それはオランダ改革派としては、これ以上野放しにできないとの判断から、警告を与えるなどの対処がとられた。このことは、当時のヨーロッパにあって類まれなる宗教的寛容の国オランダで、ピューリタン分離派が宗教的少数者として自らの信仰的立場を公にする必要を促された事情と関係していると思われる。

アムステルダムのピューリタン分離派たちは一連の信仰告白を公にしたが、そうすることで、自らの信仰的立場とその神学的根拠を明らかにしようとしたのであろう。そのうちの主要なものは、*A True Description out of the Word of God, of the Visible Church* (1589年)、*A True Confession* (1596年) の2つの宣言文である。前者は、1593年にイングランド国内で獄につながれたヘンリー・バロウ (Henry Barrowe, c.1550-1593)、ジョン・グリーンウッド (John Greenwood, d.1593) ら若き指導者が獄中で書き、それがオランダに密かに持ち込まれて、ドルト、アムステルダムで印刷された。内容は、神学的な論文というよりも、教会生活に関係した実際的な提言に留まっている。後者は、イングランド国内で議会による分離派への締めつけが強化された1593年以後に分離派の国外亡命が顕著になった時期、オランダに到着した分離派が自らの教会を創設した際に作成され、1596年にアムステルダムで公にされた。因みに、バロウとグリーンウッドは投獄後間もなくイングランドで処刑されている。

分離派たちが「宗教的少数者として自らの信仰的立場を公に宣言する必要があった」のは、亡命先でも国家による迫害が予測されたからであろう。既に述べたように、時のイングランド国王ジェームズ1世は徹底した国教会主義者であり、反国教会派たちへの迫害は容赦がなかったため、たとえブラウ

ン派と直接的な関係がなくても、ブラウン派の嫌疑をかけられた者たちはそれを何としても払拭すべきであったはずである¹²。アムステルダムの分離派に対する社会的・宗教的冷遇は、以上のようなことから招かれたとする研究もある¹³。しかしながら、アムステルダムの分離派に対する社会的・宗教的冷遇は、「それだけ」が要因であったとは断言はできないであろう。オランダ側にそれを惹き起こした分離派の持つ信仰の立場や内容にこそ、その種があったものと思われる。故国イングランドでもそうであったように、アムステルダムの分離派はオランダの国教会に相当する改革派教会を厳しく批判したが、Sprungerはその批判の内容を次の10項目にまとめ、以下のように要約している。

1. The church at Amsterdam is confused and lacks good order because it never meets together as one congregation ; the ministers do not uphold the Lord's Day ; the attendance of the member can do not be checked ; and excommunication and other public action can not be properly done ;
2. They baptize children of non-members ;
3. They use prayers in public worship other than the Lord's Prayer ;
4. They do not observe the command of Christ in Matthew 18 : 15-17 about discipline and "Tell it to the Church" ;
5. They worship in buildings which formerly were devoted to anti-Christ ;

12 ブラウン派は、独立派、アナバプテストと同様に、初期イングランド分離派の総称である。その呼称は1620年にはすでに確立されていた。「ブラウン派」と特別に呼ばれるのは、ブラウンの思想に傾倒し、その実践を目論むグループを他の分離派のグループから区別するためであった。このことは、それだけイングランド国内でブラウンの思想が危険視され、破壊的な力を持っていると認識されていたことを意味する。

13 Coggins, 46. それに加えて当時のオランダ改革派の牽制も指摘する。その論拠は、国家教会としての自負を持っていたオランダ改革派の他教派への厳しい姿勢である。オランダ改革派は分離派の説教内容を危険視し、警告の為、ライデン大学神学部の教授ジェイコブ・アルミニウス (Jacob Arminius, 1560-1609) を市内の分離派に派遣している (Sprunger, 46-7)。しかし、イングランドの改革派教会に対しては、この類の対処はなかった (Sprunger, 50-2)。

6. They do not support their ministers in the manner that Christ commands (I Corinthians 9 : 14) but follow the example of the Papists ;
7. Their elders are elected annually, not for life ;
8. They hold marriages in the church, as if it were an ecclesiastical service whereas it belongs to civil authority only ;
9. They use a new church punishment of suspension which Christ did not ordain ;
10. They commemorate special days as being Christ's birth, resurrection, and ascension¹⁴.

以上から明らかなように、批判の大半は、主日の厳守、教会内規律の緩み、各教会の自治と独立に関するオランダ改革派教会の意識の薄さに集中しており、その上で、非教会員の子弟にバプテスマを授けていること、礼拝で主の祈り以外の祈りが使われていること等が含まれている。これらは教会内の職制を含むオランダ改革派それ自体に対する批判であるので、このような分離派の説教はアムステルダムのオランダ改革派を警戒させ、その結末として、アムステルダムにおける社会的・宗教的冷遇は当然と言えよう。

そうであれば、宗教的寛容を標榜していたアムステルダムにあったにもかかわらず、分離派が信仰の立場を文言化する必要に迫られたことは納得がゆく。その要点が分離派の教会理解に関する弁明にあったことも推測されるのは、*A True Description out of the Word of God, of the Visible Church* に比べて内容的に神学的な性格を備える *A True Confession* の全45項の内、第16項から38項までは教会に関係するものであり、他の項に比べて格段に手厚く扱われていることから言えることである。この信仰告白は、後年1644年、ロンドン市内のパティキュラー・バプテスト7教会が自らの信仰告白（ロンドン信仰告白）を作成する時にモデルとして採用されたが、この信仰告白作成の目的もまた、自らの教会に向けられた誤解を解くことにあったと推論できる

14 Sprunger, 54. 脚注 11 の分離派に対するアルミニウスの警告もこの分離派の批判内容に関連していたものと思われる。

のは、結びの文章からも明らかである¹⁵。パティキュラー・バプテストたちは、自分たちと同じように信仰者のバプテスマを教会員資格として教会形成をしていた異なる種類のバプテスト（ジェネラル・バプテスト）による成文化された信仰表明（『オランダのアムステルダムに居留するイングランド人の信仰宣言、1611年』が存在していたにもかかわらず、分離派の信仰告白（*A True Confession*）を手本に選んだのである。

A True Description out of the Word of God, of the Visible Church はラテン語に訳され、1598年にライデン、セントアンドリュース（スコットランド）、ハイデルベルグ、ジュネーブなどの国内外の都市、特に大学に向けて送られたが、そこからは期待していたような応答や反応はほとんど得られなかった。それらの地域におけるピューリタン分離派に対する認識は、公共の安寧を乱す異端者以上のもではなく、むしろ、カトリックと袂を分かち、国民教会を立ち上げ、本国で分離派に対して強硬策をとっていたイングランドとそのイングランドの体制教会であるイングランド国教会の方を真実の教会として見なしていた可能性が高い。アムステルダムにおける分離派教会への冷遇はこれと深く関係していたとする研究もある¹⁶。

3 アムステルダムのスミスとヘルウィス

以上から、アムステルダム市内において十分に危険分子とみなされていた分離派教会から、スミスの会衆は「さらに」分離したことになる。スミスの会衆は分離派の古代教会と実質的な合同はしていないので、「一切の交わりを絶った」とする方が事実としては近いであろう。この分離はスミス

15 そこには、“Thus we desire to give unto Christ that which is His, and unto all lawful Authority that which is their due, and to owe nothing to any many but love, to live quietly and peaceably, at is becometh saints, endeavoring in all things to keep a good conscience, and to do unto every man (of what judgment so ever) as we would they should do unto us, that as our practice is, so it may prove us to a conscionable, quiet, and harmless people, (no ways dangerous or troublesome to human Society) and to labor and work with our hands,...” とある。

16 Sprunger, 52-3.

らがオランダに上陸してから一年にも満たない短期間に生じており、それが激しい言い争いを意味する「quarrel」の結果であったことがスマイスの文書から推測される¹⁷。その内容は、スマイスによる分離派教会の批判であり、その批判については、*The Differences of The Churches of the Separation* (1608)の冒頭の3項目にわたる出版理由によって裏打ちされているように思える。その文書の執筆目的は、第一に、分離派によってかけられた嫌疑に関して「真理を愛するすべての人々 (every true lover of the truth) を満足させる」ためであり、第二は、第一の理由と関連して、自分たちの教会にかけられた不正に満ちた中傷を打ち消すためであり、第三は、真理を明らかにし、教会の礼拝と職制に関する不正を明らかにするためであるとしている¹⁸。両者の相違の始まりをどの時点まで遡るのが妥当かについては議論を要するが、信仰による契約共同体としての教会理解、入会と教会形成における教会契約の必要性などではほとんど共通していたにもかかわらず、両者に激しい批判が行き交うようになったのは、スマイスの教会における神学の「深化 (development)」の故であるとも言われてきた¹⁹。しかし、スマイスの著作ではそれを直接に言及していないばかりか、そのような神学上の進展を促すに至った経緯や経験についても触れられていない。研究者の間では、Cogginsが彼自身の解釈として著書で4頁にわたって触れているに留まっている。そのポイントは、スマイスの神学的議論の中心は、分離派の教会理解の柱であった契約理解から導きだされた「further light」と英語で表現される、人間を超えた神の神秘、すなわち聖霊に関する議論であったとしている²⁰。

スマイスの聖霊に関する議論は、*The Differences of the Churches of the Separation* の中の、分離派との礼拝に対する理解の相違の記述に明らかにされている。スマイスは「礼拝は霊的でなければならない」と述べ、霊的な礼拝を定義して、祈祷、説教、詩篇歌の讚美、バプテスマと主の晩餐という2つの

17 Coggins, 48-56.この部分のタイトルは「The Quarrel with the Ancient Church」。

18 John Smyth, W. T. Whitely, ed., *The Works of John Smyth, Volume 1* (Cambridge: 1915, reprint by The Baptist Standard Bearer, 2009), 269.

19 Coggins, 49.

20 Coggins, 117-120.

礼典の執行が含まれている。スミスはこれらを新約聖書のミニストリーと呼び、「霊のミニストリーである」と述べる。

Wee hould that the worship of the new testament properly so called is spirituall proceeding originally from the heart. Reading words out of a book is the ministration of the letter, ...namely a part of the ministerie of the Old Testament which is abolished. . . the ministerie of the new testament is the ministerie of the spirit²¹.

スミスは、旧約聖書と新約聖書の間に一線を画し、その関係を「文字と霊」という対比で捉えている。スミスがこう述べる一年前、自著 *Paralleles, Censures, Observations* で、「旧約聖書と新約聖書の間には、大きな相違が横たわっている。それは、印とその印を指し示すもの、文字面のことと霊的なこと、文字と霊の間にある相違と同じである」と述べて、教会とは、新約聖書が教えるように、神によって呼び出され、集められた個々の信仰者たちから成る「見える教会」であると述べている²²。教会は「霊」すなわち「信仰」によって結ばれる者たちによる信仰者の共同体であるので、その教会の礼拝は「霊的」、つまり「信仰に基づき」、「信仰で結ばれた者たちによる」ものでなければならないと考えた。スミスは「新約聖書が教える教会、霊的な礼拝が行われる場としての教会」の聖書的根拠をとりわけ使徒言行録とコリント信徒への手紙1に置き、みずからの教会理解、礼拝理解、バプテスマ理解の多くの聖書的根拠もその聖書箇所求めた。バプテストとなった後に書いた *The Character of the Beast* には、アムステルダムの分離派教会指導者リチャード・クリフトン (Richard Clifton, d.1616) と議論を戦わせ、分離派教会に対する批判を展開している。そのポイントは、新生児洗礼の否定、教会への入会資格としてのバプテスマに必要性の2点であることから、バプテストの始祖としてのスミスは、礼拝理解のさることながら、新生児洗礼と入

21 John Smyth, "The Differences of the Churches," in *The Works of John Smyth Volume 1* (Cambridge, 1915, reprinted by the Baptist Standard Bearer, 2009), 273, 282, 302-3).

22 John Smyth, "Paralleles, Censure, Observations" in *The Works of John Smyth Volume 2* (Cambridge, 1915, reprinted by the Baptist Standard Bearer, 2009), 367-79, 451-52.

会時の教会契約の同意を求めていた分離派教会に克服しがたい神学的な相違を見て取ったことと思われる²³。

4 終わりに

スマイスらは、宗教的少数者としてアムステルダム当局によって冷遇されたイングランドのピューリタン分離派たちからも離れることで、社会的には更なる少数者としての位置に置かれることとなった。それを促したのは、具体的には、礼拝と教会の入会に関する分離派との相違であったが、この相違は両者の教会理解を巡る相違に起因するものであろう。スマイスが残した文書にも、分離派と袂を分かつに至った主要因がそこにあったであろうと推測させる部分が少なくない。スマイスの独特な教会理解は、後の信仰者のバプテスマの執行において象徴的に体现されることとなった。このように、バプテスマはその誕生の時から、みずからの信仰理解と深く結びつく教会理解に大きな関心と重い比重を置いていたことは、2012年11月のアメリカの主要キリスト教雑誌 *Christian Century* 誌に掲載されたアンドヴァー・ニュートン神学校のマーク・ハイム (Mark Heim) による、“What Makes a Baptists” と題された4頁にもわたる長い書評からも明らかである²⁴。本小論で論じてきた事柄に対して重要な点を指摘していると考えるので、その一部を紹介しておく。

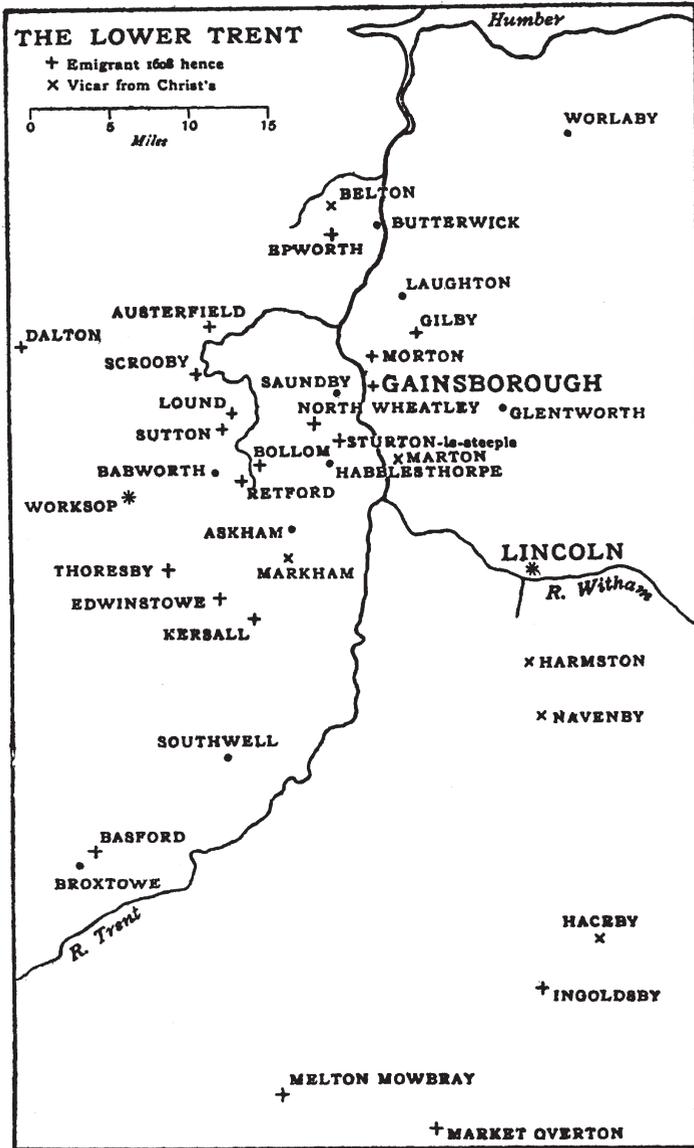
Baptists were not naive. They realized that such an open-ended approach to faith could not hope to succeed without very careful attention to the composition of the community that exercised it. Although, or because, Baptists discarded most things that others thought necessary for a church, the doctrine of the church became the

23 この詳細については拙著「バプテスマをどう考えるか—ジョン・スマイスを手がかりに—」(神学部ミッションデー講演記録『バプテスマを考える』, 西南学院神学部, 2011年) 参照。

24 S. Mark Heim, ‘What Makes a Baptist?’, (*The Christian Century*, November 14, 2012 Vol.129, No.23), pp.30-33. ハイムは、昨今相次いで出版されたバプテスマ史を扱った文献 (Robert Johnson, *A Global Introduction to Baptist Churches*, David Bebbington, *Baptists Through the Centuries*) を評する中でその点に触れている。

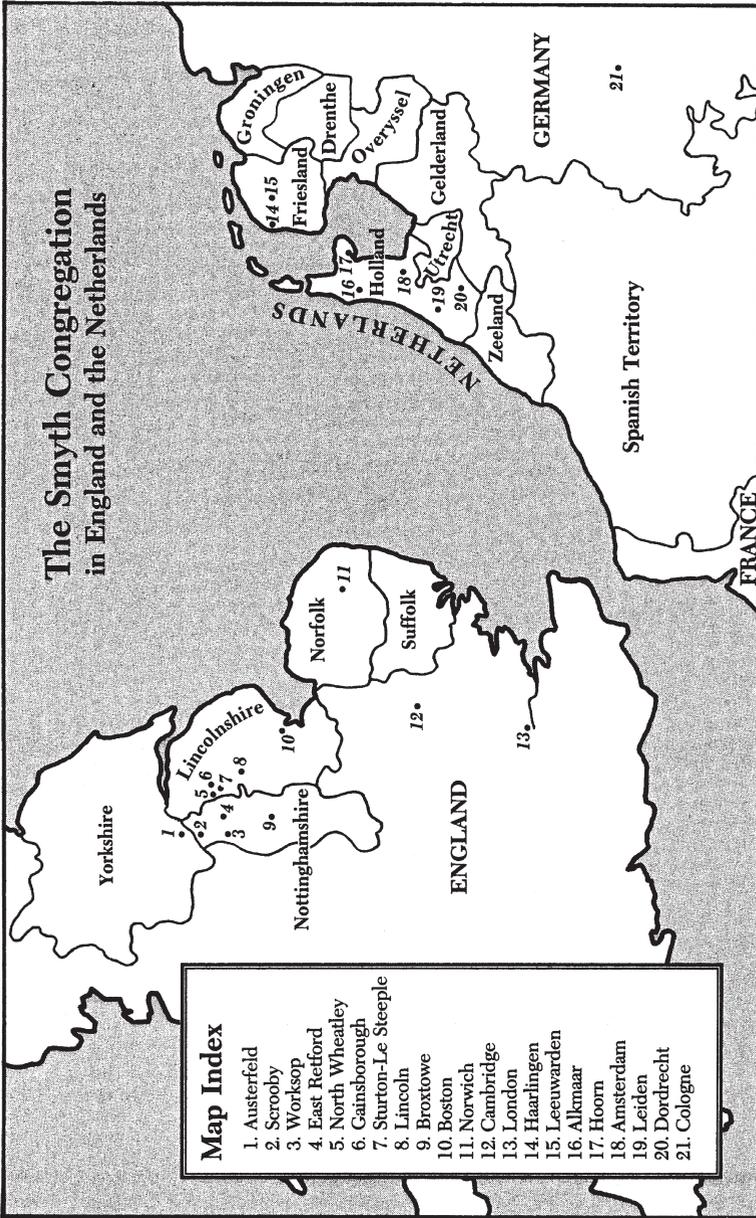
central Baptist concern. They regarded believer's baptism as the clear teaching of scripture, but it was equally the necessary membership threshold to constitute a community of interpretation that was up to this demanding task. There was no room for spiritual free riders.

アムステルダムのスミスとヘルウィスは、みずからの信仰において、聖書によって示されたと信ずる真実の教会像とその実現を求めて、短くも嵐のように目まぐるしい (restless) な内的変遷を経験したことになる。そこに、後年のバプテスト派誕生に至る重要な神学的テーマが含まれていたことは間違いないと思われる。その後、スミスとヘルウィスは信仰者のバプテストマを以って新しい教会を始めるも、最終的には別々の道を歩むことになる。その原因も「何を以って、聖書が示す真実の教会とするのか」という点にあった。バプテストをバプテストたらしめたものは何か。その問いへの取り組みのために、スミス - ヘルウィスの分離を巡る更なる研究が必要とされる。



W. T. Whitley, ed., The Works of John Smyth, Vol. 1 (Cambridge: Cambridge University press, 1915) より

地図 1



James R. Coggins, *John Smyth's Congregation : English Separatism, Mennonite Influence, and the Elect Nation* (Waterloo, Ontario : Herald Press, 1991) より

地図 2